新潟市教育相談センターだより

もえぎ

第 105 号
２０１９年７月１０日
新潟市教育相談センター
新潟市中央区西大畑町458番地1
TEL（025）222－8600（代表）
FAX（025）222－8303
E-mail:sodan.ed@city.niigata.lg.jp

“黒子に徹する”ということ

教育相談部　**遠　藤　美　紀**

“黒子に徹する”を合言葉に私たち教育相談センター・各区教育相談室の職員は，日々相談を通して，来所者の方々の支援をさせていただいています。

ところで，黒子の意味をあらためて調べてみますと，黒衣とも書き，舞台上で黒い衣装を着て，役者の演技を助ける人のことや，表に出ないで影で支える人，後見人という意味がありました。私たちは，まさしくこの意味で黒子になって教育相談を行っているのです。というのも，来所される児童・生徒の皆さんや保護者の方々の困っていることについてお話をじっくり聴かせていただき，一歩ずつ歩んでいくことができるように影で支援をさせていただくことしかできないからです。すぐに改善できる魔法のような方法や言葉があるのではないかと思われている方がよくいらっしゃいますが，そのようなものはありません。もし，魔法のような効果を感じられているのであれば，それは相談者ご自身が相談の中で気付き，自己決定をして歩み出しているからではないでしょうか。要するに，ご自身の力で，私たちの支援を魔法に変えているということです。あくまでも，ご自身が決め，ご自身で始めの一歩を踏み出していかれることが大切なのです。

さて，私たちができる支援とは，今までも「もえぎ」で繰り返し紹介させていただいていますが，面接ばかりではなく，いろいろなメニューを用意しています。例えば，プレイルームで遊んだり，卓球やバドミントンをしたり，イラストを描いたり，料理をしたり…。ご本人と一緒に考えて活動をしています。それらの活動を通して，心の元気を貯めていくことや自分の心に気付いていくことができ，一歩踏み出す準備が始まります。また，保護者の方々とは，本人とどのように寄り添っていくかについて面接を通して，ご一緒に考えさせていただきます。

受付は，保護者の方々の電話からとなりますので，まずは教育相談センターや各区教育相談室にお電話をおかけください。黒子としてお待ちしています。

令和元年度「教育相談研究会」のお知らせ

昨年度も教育相談センターや各区教育相談室の主訴の８割を超えているのが不登校です。

当センターでは，文部科学省や新潟市教育委員会より通知され，各学校でも取り組まれています「児童生徒理解・教育支援シート」（以下，支援シートと略）の活用をテーマとして，研究を進めて三年目となりました。

一年目は子どもが動く見立てを，二年目は本人の合意のもとスモールステップで目標を立て，ＰＤＣＡサイクルで繰り返し本人に寄り添った教育相談のあり方を皆さんに提案して参りました。

三年目はまとめの年として，二年間の研究を踏まえ，「支援シート」を活用して，センター内や学校，他機関とどのように連携していけばよいかについて提案させていただきたいと考えております。

右のように開催いたしますので，ぜひ参加していただき，どうぞご意見もお聞かせくださるようお願いいたします。

基調講演，
適応指導部実践発表アドバイザー
新潟大学准教授　**田中　恒彦**　様

教育相談部実践発表アドバイザー
新潟青陵大学大学院教授
佐藤　　亨　様

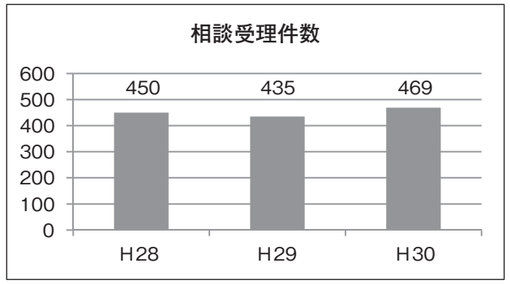
＜開催日時＞
令和元年11月20日（水）　13時30分～16時30分
＜会　　場＞新潟市教育相談センター
＜基調講演＞新潟大学　准教授　田中恒彦先生
＜各分科会アドバイザー＞
新潟大学　　准教授　田中恒彦先生
新潟青陵大学大学院　教　授　佐藤　亨先生

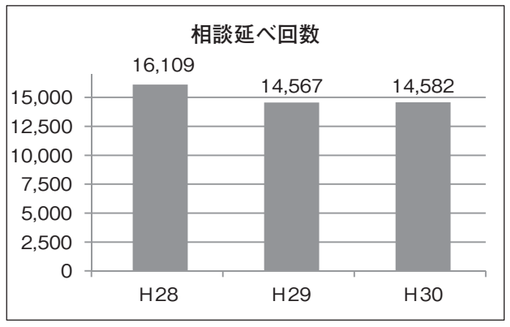
詳細につきましては，９月上旬にメール配信をいたします。添付されています申込書に記入され，お申し込みください。

平成30年度 相談集計特集

教育相談センターと各区(北, 江南, 秋葉, 南, 西蒲)教育相談室では，児童生徒及び保護者への相談支援として「来所相談」,「適応指導教室」,「訪問教育相談」,「夜間『学習・進路相談室』」「いじめSOS電話相談」(夜間といじめSOS電話は教育相談センターのみ）を行っています。この度，平成30年度の相談状況がまとまりましたのでお伝えします。

1 相談受理件数, 延べ回数ともに横ばい傾向

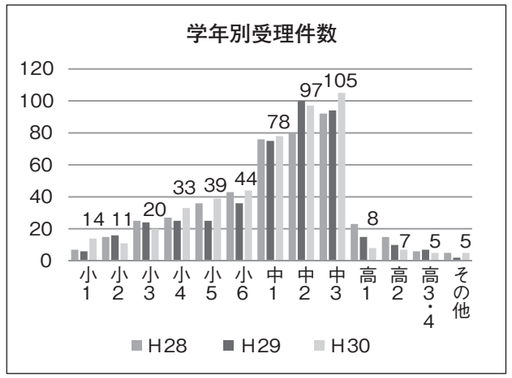




相談受理件数とは,「来所相談」と「訪問教育相談」の受付件数です。年間で何回相談しても1人の相談者は1件として集計しています。逆に，相談延べ回数は，実際に相談した回数の総計です。

年間の「相談受理件数」「延べ回数」ともに，横ばい状態が続いています。

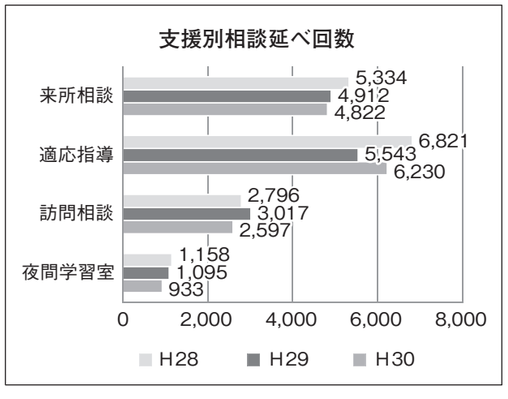
2 中2, 中3の件数が特に多く, 中学生が60%



相談受理件数を学年別で見ると，小学校高学年から徐々に増加し始め，中学校で一気に増加し，高校生になると急激に減少するのがここ数年の全国的な傾向です。

H30年度の値を前年比で見てみると，小1がやや増加したものの学年別の相談受理件数は，ほぼ前年並みでした。中学生の全体に占める割合は約60%で，特に中2，中3の相談受理件数は100件前後と依然高い数値となっています。中学生を取り巻く環境が，年々，複雑かつ多様化していることが懸念されます。

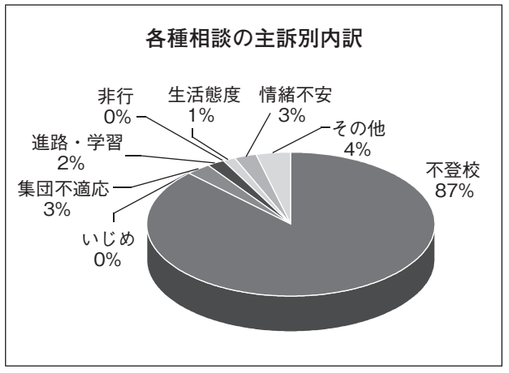
3 「適応指導」以外の支援形態が減少



支援形態別で見ると，「適応指導教室」が前年比で700回近く増加しましたが，他は減少しています。

適応指導教室はセンター及び各区教育相談室と市内に6室ありますが，通室生が増える傾向にあり，前年度は147名の児童生徒が通室しました。また，例年に比して，9月～ 12月にかけて学校復帰や進路実現に向けて通室を始めた児童生徒が多くいました。通室生に対する所内相談の件数も大幅に増えており，手厚い個別相談・個別対応が必要な通室生が増えています。

4 相談主訴の約87%が「不登校」



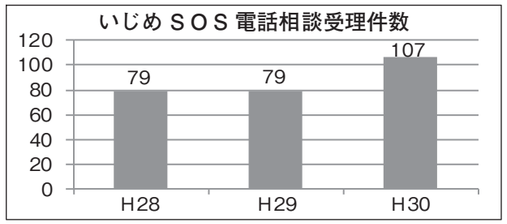
「主訴」とは，相談者の抱える複数の訴えの中で，最も中心的な訴えのことです。

そして，その主訴の中で「不登校」の割合が，H26年度は67%，H27年度は73%，H28年度は82%と次第に大きくなり，一昨年度は85%，さらに昨年度は87%と増え，過去最高となりました。全国的にも，小・中学校の不登校児童生徒数が平成25年度から増加に転じ，その後，高水準で推移するなど憂慮すべき状況であります。

主訴は不登校といっても要因は，友人関係，集団不適応，進路・学業，家庭環境・親子関係，学校不信など様々です。継続した相談を重ねながら，相談者の思いを丁寧に聴き取るなど，個々に寄り添った相談・支援が一層求められています。

5 いじめSOS電話相談件数は増加傾向

センターや各相談室では，原則として，一般電話相談は行っていません。相談は来所相談が原則です。しかし，来所相談を受け付けるにあたり，ファースト・コンタクトの電話でも深刻な相談内容の場合も多くあります。その様な場合には，電話による相談に誠実に対応させていただいております。



全国的に実施されている「いじめSOS電話相談」の当センターでの受理件数は，年間100件を超え，増加しました。

また，近年，悩みや困りごとを抱える若年層世代が，より気軽に相談できるように，SNS（LINEなどのソーシャルネットワークシステム）を使った「いじめ相談」が全国的に試行されています。本県でも，LINEを使った「いじめ相談」が昨年度より実施されています（相談対応は当センターではありません）。

最後に

「相談集計」の考察は非常に難しいものです。例えば「相談件数が減った」と言っても，それは「相談者の信頼や認知度が下がった」と危機的に捉えるべきなのか,「悩みや困りごとを抱える相談者が減った」と職責遂行のモチベーションにしてよいのか，数値だけでは見取れません。

私どもは「相談集計」に基づいた経年変化や傾向を把握するとともに，日々の教育相談を通した「主観的な見取り」と照らし合わせながら，相談状況を考察し，当センターが教育のセーフティーネット機関として，皆様から一層信頼され安心して利用されるよう，業務評価や業務改善を進めていきたいと考えています。

職員の専門性を高める 大学・市教委連携教育相談事業

担当　教育相談部主任　**遠藤　美紀**

当センター・各区教育相談室来所者の方々や職員のために，新潟大学と新潟青陵大学の先生方からご協力をいただいています「大学・市教委連携教育相談事業」は，36年目を迎えました。

今年度も，相談指導，教育相談，事例研究会，講義などで，臨床，医療，特別支援と，それぞれ専門的なお立場からのご指導やご助言をいただき，そのことを来所者の方々への支援に活かしていくように，私たち職員一同，努めてまいります。

～ご協力いただいている大学の先生方～

＜新潟大学＞

- 教　授　横山　知行先生
- 教　授　長澤　正樹先生
- 教　授　神村　栄一先生
- 教　授　有川　宏幸先生
- 准教授　田中　恒彦先生
- 准教授　小堀　彩子先生
- 准教授　入山満恵子先生

＜新潟青陵大学大学院＞

- 教　授　伊藤真理子先生
- 教　授　佐藤　　亨先生
- 准教授　浅田　剛正先生

コラム

チーム「ぐみの木」

『ONE PIECE』という漫画をご存じでしょうか。今もなお週刊誌に連載され，2015年に「最も多く発行された単一作者によるコミックシリーズ」としてギネス世界記録に認定されています。この漫画には，様々な職業をもつキャラクターが出てきますが，実に多種多様で，大変魅力的です。そして，それぞれのキャラクターが自分自身の役割についてとても真摯に考え，その職業についてのプライドと自信を兼ね備えているのです。

さて，当センターのぐみの木教室にも，実に魅力的なスタッフがいます。総勢10名。奇しくも「麦わらの一味」と同数です（※仲間確定を含む）。今年度から勤務させていただいている私にとっては，本当に心強い味方です。どの学校でも「チーム学校」として日々の教育活動に取り組んでいるのと同様，ぐみの木教室においても，10名のスタッフがチームとして毎日通室生と過ごしています。

今日もデスク越しに「○○ってどうなってるんですか？」とスタッフに質問攻めです。いつもいつも助けてもらってばかりです。でも，「それでいいんだよな！」と最近では開き直るようになりました。『ONE PIECE』の主人公ルフィのせりふに，次のようなものがあります。

「おれは助けてもらわねェと生きていけねェ自信がある！」

まもなく夏休みを迎えますが，ぐみの木教室に通室してくる全ての子どもたちが，笑顔で元気に過ごすことができるよう，これからもチームとして協働しながら頑張っていきます。ただし，もみじが舞い散る頃には，助けてもらうばかりではなく，ちょっとだけ助ける側になれるといいなと思っています。

（適応指導部　松島慎一郎）

訪問教育相談の紹介

少しずつ…成長を支援します

訪問教育相談部主任　**熊谷　博純**

訪問教育相談は，不登校または不登校傾向の児童生徒の家庭などを訪問し，児童生徒や保護者との相談を通して学校復帰を支援することを目的として行われています。

担当するのは，現在全市で15名いる訪問教育相談員。学校を通して家庭から要請があると，担当の訪問相談員が主に家庭に出向き，その子と話をしたり一緒に活動したりしています。

具体的にはゲームやトランプなどで遊んだり，工作や絵描きなどの創作活動をしたり，計算問題などの学習をしたりしています。天気のよい日には，外でボール投げやサッカーをすることもあります。

そのような活動の中で子どもたちは元気になり，エネルギーを蓄えて次の一歩を踏み出して行きます。全く登校しなかったある男子小学生は，母親と週末放課後登校を始めました。学校の適応指導学級に通い出した女子中学生もいます。

訪問してもなかなか会えなかったり話しかけても返事が返ってこなかったりすることもありますが，訪問相談員が継続して関わることで子どもたちの変化・成長を促しているのではないかと考えています。

訪問相談の申し込みには，家庭や学校からの書類の提出が必要ですが，その手続きをしない**「お試し訪問相談」**も行っております。ご希望の際は，当センターにご連絡ください。